

監修

佐佐木信綱
柳田國男
新村出
山田孝雄
津田左右吉
和田哲郎

今

鏡

板橋倫行校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書

「今 鏡」 板橋倫行校註

昭和二十五年十一月二十日初版發行

昭和三十一年三月三十日第三版發行

印刷所 精興社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 三五〇圓

目次

解 説

大鏡を繼ぐもの……………	三	今鏡の諸傳本……………	二五
今鏡と小鏡と續世繼……………	五	畠山本と尾張本など……………	二六
いつ筆が執られたか……………	七	白鳥の唄……………	三〇
今鏡の描くもの……………	一〇	いままでの研究……………	三九
推定される作者……………	一九		

系 凡 本

圖……………	四〇
例……………	四八
文……………	五一
目 録……………	五一
目 次……………	五一

序

すべらぎの上第一

雲井

六〇

望月

七五

子の日

六四

菊の宴

七六

初春

六六

黄金の御法

八〇

星合ひ

七一

司召し

八三

すべらぎの中第二

手向

八九

所々の御寺

一〇九

御法の師

九一

白河の花の宴

一一一

紅葉の御狩

九五

鳥羽の御賀

一二五

釣せぬ浦々

一〇〇

春の調

一九

玉章

一〇四

八重の潮路

一三三

すべらぎの下第三

男山

二七

内宴

一四一

蟲の音

一三三

をとめの姿

一四四

大内わたり

一三六

鄙の別れ

一四六

花園の匂ひ……………一四九

二葉の松……………一五三

藤波の上第四……………一五六

藤波……………一五六

はちすの露……………一七五

梅の匂ひ……………一六一

小野の御幸……………一七六

伏見の雪のあした……………一六三

薄花櫻……………一七九

雲のかへし……………一六九

波の上の杯……………一八二

白河のわたり……………一七一

宇治の川瀬……………一八四

藤波の中第五……………一九四

御笠の松……………一九四

飾太刀……………二一〇

菊の露……………一九九

苔の衣……………二一六

藤の初花……………二〇三

花の山……………二二〇

濱千鳥……………二〇五

水荳……………二二五

使合……………二〇八

故郷の花の色……………二二七

藤波の下第六……………二三一

繪合の歌……………二三二

旅寝のとこ……………二三八

唐人の遊び……………二三五

弓の音……………二四一

目次

四

雁がね	二四六	花散る庭の面	二六八
ますみの影	二五二	宮城野	二七二
竹のよ	二五六	志賀のみそぎ	二七八
梅の木の下	二六〇		
村上の源氏第七	二八三		

うたた寝	二八三	紫のゆかり	二九九
堀河の流れ	二八七	新枕	三〇三
夢の通ひ路	二九一	武蔵野の草	三〇七
根合	二九四	藻鹽の煙	三二四
有栖川	二九六		

御子たち第八	三二七		
--------	-----	--	--

源氏の御息所	三三七	月の隠るゝ山のは	三三九
花のあるじ	三三〇	腹々の御子	三三三
伏し柴	三三六		

昔語第九	三四四		
鞆たづ	三四四	祈る驗	三四七

唐歌

三五

賢き道々

三六

眞の道

三五

打聞第十

三六

敷島の打聞

三六

作り物語のゆくへ

三六

奈良の御代

三六

目

次

五

今

鏡

板
橋
倫
行

解 說

大鏡を繼ぐもの

朝廷で編修を重ねてゐた漢文體の歴史は普通六國史の名で呼ばれてゐるが、日本書紀にはじまり文德實錄をもつて終る。そして文德實錄以後は修史のことは中絶の姿となつた。もつとも四十卷あるいは五十卷の新國史すなはち續三代實錄が村上天皇の御代に編修を企てられたが、完成を見ずにやんだ。ここに新しく登場して來たのが私人の編修による假名文の國史、物語體の國史であつた。普通に四鏡といつてゐる大鏡・今鏡・水鏡・増鏡がそれである。

四鏡のうちもつとも早く書かれたのが大鏡であつて、文德天皇から後一條天皇の萬壽二年までをその内容とする。この大鏡をうけ繼がうとしてゐるのが、ここにとりあげる今鏡である。年代的にも大鏡と相接して後一條天皇の萬壽二年からはじまり、高倉天皇の嘉應二年に至つてゐる。

その冒頭の長谷寺詣でのついでに出あつた老女の昔語りの形式も、大鏡の雲林院菩提講の席上での世繼・繁樹の二老人と一若侍との對談の形式に倣つたことは明かである。しかも語り手の老女が「私の祖

父は賤しいものでした。名は世繼といひましたが、御覽になつたでせう、口任せに語つた物語りが、今にのこつてゐます」と云つて、大鏡の語り手を祖父と説き做して、その物語り以後の事がらを物語らうといふところからも、大鏡に倣ひ大鏡を繼ぐものであることを自ら承認してゐる。

これを體裁の上から見ても同じことがいへる。最初に天皇の紀が順次に述べられる。これが「すべらぎ」の上中下三卷。つぎに臣下のことが列傳體にあつかはれる。藤原氏に關したのが「藤波」の卷三卷で、源氏についてのものが、「村上の源氏」の卷である。轉じて皇子たちの上が述べられる。それが「御子たち」の卷である。ついで傳説逸話に移り、「昔語」と「打聞」の卷々がそれにあてられる。この天皇紀・列傳・逸事の順序はまつたく大鏡の體裁を襲つたものに外ならない。

しかるに今鏡は榮花物語を承け繼いだものと久しく考へられてゐた。例へば黒川春村などは、この書の著者が中山忠親であるべきだと論じて、その次に「この公は、大鏡より上を補ひたまへば、榮華物語の後をも補はむとて、またこの書を著はされしなるべし」といひ、安藤爲章も「榮華物語の續篇とすべきものなるべし」として、本書が當然榮花物語の後を繼いだものと認めてゐる。

しかし榮花物語は村上天皇から堀河天皇に至り、その間、道長を中心としながら、頼通・師實・師通・忠實の諸公に言ひ及んでゐるので、今鏡と重複するところが多い。そのみでなく、榮花物語に出てゐる歌で本書のうちに見えてゐるのはあるが、大鏡に出たものは本書には一つも載せてゐない。

これらの點から見て、今鏡は決して榮花物語を承け繼いだものではないが、その作り物語流の流暢典雅な文體と、物語風な優雅な卷々の標題の選び方が榮花のそれにきはめて類似してゐる點——これは勿論榮花の影響と見做すべきであらうが——からさうした誤解が當然生じたのであらう。また今鏡が續世繼といふ別名で呼ばれてをり、世繼の名が時として榮花物語を指すところから、榮花物語の續篇と考へられるに至つたこともあらう。

勿論、今鏡が榮花物語の影響を受けないといふのではないが、今鏡がその續篇たらうと志した大鏡の影響の方を重視することが必要である。史書の體裁からいつても、榮花物語は編年體であつて、大鏡及び今鏡の紀傳體とはあくまで異つてゐる。

今鏡と小鏡と續世繼

この書の正當の名前は今鏡であるが、あるいは小鏡とも名乗らうとしたらしい。それは本書の序に、古をかゞみ、今をかゞみるなどいふ事にてあるに、古も餘りなり。今鏡とやいはまし。まだをささしげなる程よりも、年も積らずみめもさゝやかなるに、小鏡とや付けまし。

とあるによつて明かである。

今鏡は水鏡の古きにむかへ、小鏡は大鏡に對へる名であらうとするのが黒川春村の説（碩鼠漫筆卷六）

だが、小鏡が大鏡に對しての名であることは昔へるが、今鏡が水鏡の古きにむかへる名であるといふ解釋は受け取れない。何となれば、今鏡が述作される時、水鏡はいまだ存在してゐなかつたであらうから。

本書序でいふ「古も餘りなり。今鏡とやいはまし」の基くところは、白氏文集の百鍊鏡の「太宗常以人爲鏡、鑒古鑒今。不鑒容」といふ言葉にあることはいふまでもない。今鏡の名はこゝに起るが、大鏡のなかの、

すべらぎのあとつぎ／＼に隠れなく新たに見ゆる古鏡かな

といふ歌の古鏡に對して、大鏡の後を繼ぐ新しい鏡といふ意味合ひを含めて今鏡といつたものであらう。

史書をかがみと呼ぶことは東西に於て古くから見られるところである。中國では唐鑑などと用ゐられてゐるが、もつとも著名なのは資治通鑑の名であらう。ドイツに於けるザクセン・シュビーゲル（ザクセンの鏡）もまたその類例である。

今鏡・小鏡のうち古く世に行はれたのは今鏡であつた。増鏡の序にも「なにがしの大臣の書き給へり」と聞き侍りし今鏡に」とあり、本朝書籍目録にも今鏡十卷と見えてゐる。

それがいつしか續世繼といふ名にとつて變られた。その古い用例としては日本紀私抄をあげることが

出来る。また現在今鏡の最古の寫本である畠山本の第一冊(補寫)内題には新世繼とある。世繼とは元來歷代の史實を記した書の汎稱であらうが、大鏡が世繼の翁によつて物語られたので世繼の物語と呼ばれてゐるので、それを繼ぐものとして續世繼あるいは新世繼の名が生じたのである。ところが榮花物語も時として世繼の物語と呼ばれる(増鏡序)ので、本書が榮花物語の續篇のやうに古くから誤解されてゐたことはすでに指摘した通りである。

いつ筆が執られたか

本書の序に「今年は嘉應二年庚寅なれば」とあつて、今鏡の成立が嘉應二年であることは動かないやうに見える。これについて黒川春村は考察をめぐらして、

この書を作り出でしは、嘉應二年庚寅と序文に見えて論なけれど、實は前年の春などの程より、書きそめられしものなるべし。其の徴は、第八はらばらの御子の卷に「宰相中將家政と聞えし御女、待賢門院におはしましけるも、鳥羽院の御子生み奉り給へりし、吉田の齋宮と申しき。それもうせ給ひて、八九年にもやなり侍りぬらむ」とあるにて知らる。此の齋宮は鳥羽院第三の皇女にて、應保元年十月三日薨去の由、一代要記に見えたり。應保元年より九年の後は、即ち嘉應元年にあたれり。(碩鼠漫筆卷六)

といふ。つまり今鏡は嘉應元年の春ごろから書き始められて、嘉應二年に完成したといふのが春村の結論である。

關根正直氏は更にこの述作年時を細かく限定されて、

予亦按ふに、第六唐人の遊びの巻にも、「宗能の内大臣と聞え給ふ云々、八十にや餘り給ひぬらむ。ひとり残り給へるとぞ」とかける宗能公も、尊卑分脈系譜を見るに、嘉應二年の二月廿一日に薨ぜしなれば、それより前の撰著なるべし。（今鏡新註）

と嘉應二年の完成といつても、その二月廿一日以前に成立したものと限界されてゐる。

この二先達の結論として、今鏡は嘉應元年から書き始められ、同二年の春に書き上つたことゝなり、嘉應二年撰了は動かないことゝなる。

和田英松博士またこれを裏書きされるやうに、

げにやこの書に載せたる人々の官位の中、嘉應二年を下りたるもの見えざれば、その頃撰びたるものとすも、不可なかるべし。（本朝書籍目録考證）
といはれる。

志賀のみそぎの章に覺性法親王のことをいつて、

まだ若くおはせしに、この一二年がさきに失せさせ給ひにき。

と見え、この法親王の歿したのは嘉應元年十二月十一日である（仁和寺御傳、仁和寺諸堂記）から、嘉應二年からいつて、「一二年がさき」といふのも當然のことで、これまた嘉應二年成立説を支へるものである。

しかし嘉應二年が今鏡の眞實の成立年代であることについては、私はひそかに疑ひを抱いてゐる。

二葉の松の章に平家一門の繁昌を説いて、

平氏初めは一つにおはしけれど、日記の家と、世の固めにおはする筋とは、久しう變りて、かたがた聞え給ふを、いづ方も同じ御世に、帝・后同じ氏に榮えさせ給ふめる。平野はあまたの家の氏神におはすなれど、御名もとりわきて、この神垣の榮え給ふ時なるべし。

と平氏の文臣の家系（日記の家）と武臣の家系（世の固め）とから、時を同じくして后・帝を出したことを述べ、それも平氏の氏神平野神社の氏子の榮える時節と見てゐる。

こゝで后とは建春門院平滋子——後白河院の後——を指したことは動かない。（このつゞきの文に後の母は顯頼の民部卿の娘とあるところからも）滋子の父は平時信で高棟王の系統であるから、たしかに「日記の家」の出であるが、「世の固めにおはする筋」から出たといふ帝とは誰であらうか。普通に考へられるやうに高倉天皇とすると、滋子の子であるから、「日記の家」の出で、「世の固めにおはする筋」ではない。世の固めにおはする筋から出た天子といへば、平清盛の娘の建禮門院の子、安徳天皇でなければならぬ。ところで今鏡は嘉應二年で終つて、安徳天皇の出現する譯はない。